

9月18日(火)

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 梁亜旋さんWS 和本をつくってみる

1,4回目のご来館

梁亜旋さん4回目のWSでは、さまざまな種類の和装本を手作りしてみることにしました。

初回のWSで、入口敦志先生(当館教授)から様々な大きさ、形の和本をご紹介しました。和本の作り方は大きくわけて、糊しか使わないものと、針や糸を使うものがあります。入口教授によると、道具の発達とともに作り方が変わっていったのだろうとのことで、それぞれの作り方にも歴史や意味があるのですね。

梁さんはご自身の作品で刺繍を用いることもあるのだとか。針と糸を使う和本製本は、梁さんのインスピレーションの源になるのではと思い、このWSを企画しました。

2, 列帖装^{れつじょうそう}をつくってみる

何枚か紙を重ねた束(「くくり」といいます)を糸で合わせる製法を、「列帖装^{れつじょうそう}」といいます。

この製本のために入口先生が用意してくださったのは、「嵯峨本^{さがぼん}」と呼ばれる近世初期に作られた美しい活字本の複製でした。嵯峨本は色紙に様々な模様を雲英^{きんら}摺りで施した「唐紙^{からかみ}」と呼ばれる紙で作

られており、特注で作られた鑑賞用の美術品と考えられている贅沢な本です。

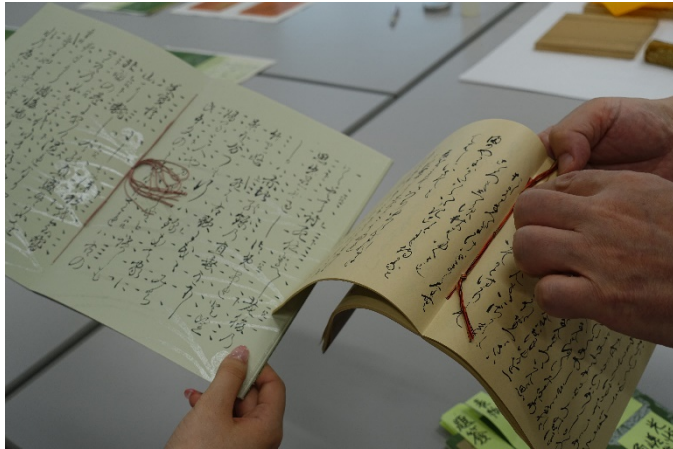
まずは順番を間違えないように重ねて折り、ふたくり作ります。



考えてみるとページの数え方が難しく、どこにどの文章を入れると正しい順番になるのか、とても頭が混乱します。このことから、嵯峨本を刷るための活字を組んだ人たちは、文字を読むことができ、文章の意味が分かる人でなければならなかったと、入口先生は考えておられるそうです。整版印刷(板木を用いた印刷)では、板木の上に版下を重ね、その上から文字を彫っていたと考えられるため、彫師が文字を読む必要はなかったと考えられます。そうすると、印刷に関わる職人達への人件費も全く違ったでしょうし、嵯峨本があ

9月18日（火）

まり作られず、江戸時代中期以降は整版印刷がメジャーになっていたのにも頷けます。本を作ってみると、色々なことに気付くのだなあと思いました。



重ねたくくりを揃えて、背の部分にナイフで四箇所切れ込みを入れます。後で針を通しやすくし、くくりがずれないようにするためですが、実際の嵯峨本を見てみると、たしかに切れ目が入っているので、やはり当時も小刀のようなものを使ったのでしょう。本を観察すると、当時つかった道具のことまで考えざるを得ません。

そして一本の糸の両端を二本の針に通し、まずは下の二つの穴に糸をくぐらせます。続けて上の二つの穴も糸で綴じ、余った糸を真ん中で結べば完成……と、文章で書くと何がなにやらですが、実際に作ってみると本当に単純な作業だったので、是非お試しください。

私は列帖装の構造を頭では知っていたものの、針を二本つかう？ どうやって？と全くイメージが出来ていませんでした。

一度体験してみるととてもよく理解できましたし、なにより美しい本（コピーですが）を自分の手で作ることができてとても嬉しかったです。

梁さんはさすがの手際で、入口先生の手順をすぐに理解され、作業されていました。最後に糸を固結びするところがとても難しく、入口先生でもよく緩んでしまうそうですが、一度できっちりと留めていらっしやいました。

糸の色を変えたり、最後の結び方をもっとお洒落にすることもできるので、是非工夫して美しい本を作っていただきたいものです。

9月18日(火)

3, 線装本(袋綴本)をつくってみる

紙を一枚ずつ山折りにして、折り目と反対側を糸で綴じる「線装本(袋綴本)」は、江戸時代に最も多く見られる形です。

この作業には、江戸時代に作られた子供用の絵本(草双紙)の初期の一種「赤本」と呼ばれる作品の複製を使います。

赤本は、五枚の紙を山折りにした十ページが一つの単位で、二つ折りにした紙を「丁」と呼びますので、五丁一冊などと数えます。

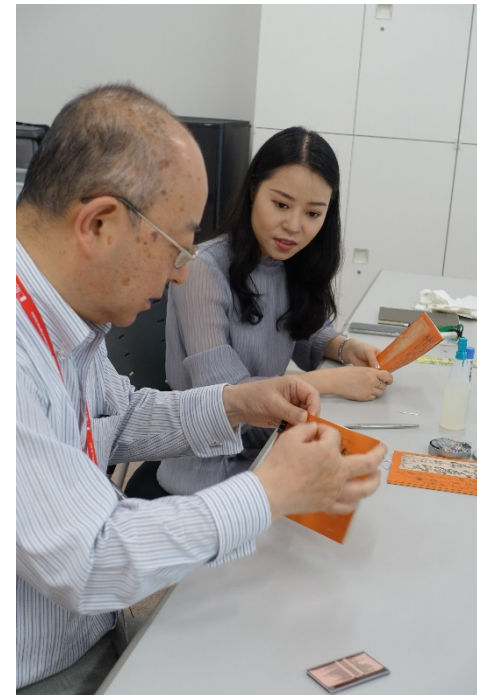
これらは整版印刷で作られるのですが、五丁が一単位なのもこの整版というところに理由があるそうです。つまり、長細い板に三丁分をまとめて彫り、裏に二丁と題簽(タイトルを書いた細い紙。表紙に貼ります)を彫ると、無駄なく板が使えてコスト削減、しかも各丁がバラバラにならないというメリットがあります。



いわれてみると確かにそうです。実際にバラバラにした紙を並べてみると、ますます納得です。

折った紙を順番に重ねることを「丁合」といいます。折り目となる真ん中(「柱」といいます)に丁数も彫られているので、順番を間違えずに揃えることができます。また、柱にはタイトルの一部(「柱題」)が記されているので、他の作品と混ぜてしまうことも防げます。

これらは読み手というよりも、作り手のためにつけられた印だったのかもしれませんが。柱題は表紙に書かれた題とは違うこともあり、不思議に思っていたのですが、作業する人が分かれば良いので、正式名称を彫る必要はないのかもしれません。こういったことにも、作業してみて初めて気付かされました。



9月18日(火)

揃えた紙のバラバラしている部分を一筆書きのように縫ってゆくのですが、位置がずれないようにあらかじめ穴を開けておく必要があります。五丁+表紙二枚を重ねているのでかなりかたくなっていて、普通の針では通りません。おそらく千枚通しのような道具を使っていたのですが、一々長さを測って均等に穴を開ける作業、効率的に行う道具は使われていなかったのでしょうか。残念ながら道具が残っていないので想像するしかないのですが、職人さんたちは便利な道具を開発していたのかもしれないですね。穴を開けるだけの単純な作業ですが、意外と謎めいた行程なのです。

また、そういった道具を使わなければならないとすると、列帖装の時よりも格段に作業工程が多く道具も必要とするので(糊で表紙に見返しを付ける作業もしています)、技術の発達とともに装訂が変わっていくという入口先生の説に、改めて納得させられます。

梁さんは始終楽しそうに手を動かしておられ、初めての体験に興奮されたようでした。

また、版本の出来る行程についてもっと詳しく知りたいというリクエストをいただいたので、次回は製本の前の段階についてWSを設けて考えてみたいと思います。

